

2025年度 大学院入学試験 問題用紙

秋 季	心理学専攻 博士前期課程 心理学コース	方 式	科 目
		A 一 般	専 門

受験番号 _____

氏 名 _____

(1 - 1)

《解答別紙》

問題Ⅰ 以下の問①～⑥のうち1つを選んで解答しなさい。

(選択した問題番号を解答用紙のカッコ内に記入すること。)

- ① 心理学研究における研究結果の再現性と、統計的仮説検定における結果の解釈の誤りとの関連について論じなさい。
- ② 構成概念の操作的定義について、具体例を挙げながら論じなさい。
- ③ 動機づけとは何かを定義しなさい。その上で人間の動機づけを説明する理論を2つ挙げ、各々の理論について具体例を挙げながら説明しなさい。さらに、2つの理論を比較し、各々の長所と短所について述べなさい。
- ④ 顔の認知に関連する研究を一つ挙げて、主要な結果と考察、その研究の意義について説明しなさい。さらに、ヒトの顔の認知処理プロセスについて、関連する脳部位との対応にもふれながら説明しなさい。
- ⑤ 犯罪の生物学的原因について行われた家系研究、養子研究、双生児研究について、それぞれの研究が見出した知見と方法論的な限界を比較しながら説明しなさい。
- ⑥ バルテスが提唱した生涯発達における発達理論について述べなさい。

問題Ⅱ 次の15個の用語の中から10個を選び、各々の用語の意味することを簡潔に説明しなさい。

(選択した用語の問題番号を解答用紙のカッコ内に記入すること。)

- ① 散布度
- ② ノンパラメトリック検定
- ③ 実験計画
- ④ SD法
- ⑤ フェヒナーの法則
- ⑥ プレグナンツの法則
- ⑦ 自己スキーマ
- ⑧ 自己知覚理論
- ⑨ レム睡眠
- ⑩ 事後情報効果
- ⑪ 秩序型殺人と無秩序型殺人
- ⑫ 内集団バイアス
- ⑬ ヴィルヘルム＝ヴント
- ⑭ 発生的認識論
- ⑮ 忘却曲線

2025年度 大学院入学試験 問題用紙

秋 季	心理学専攻 博士前期課程 心理学コース	方 式	科 目
		A 一 般	小 論 文

受験番号 _____

氏 名 _____

(3 - 1)

《解答別紙》

次の文章を読み、問に答えなさい。

日本の若者の多くは受験勉強を強いられ、偏差値を気にしているだろう。日本では長年にわたり偏差値によって学校は一直線にランク付けされ、受験生たちは模擬試験や本試験の結果に一喜一憂している。誰もが自由に学ぶ権利をもつはずなのに、学校にランク付けがあり、入学試験で排除することがあるということは奇妙でもある。

また、さまざまな研究分野をもつ大学が、なぜ「私立文系」「国立理系」といった雑なくりのなかで序列がつけられるのだろうか。私たちはそれぞれ興味を持つことが異なり、そもそも興味や得意は、中学や高校で行われる教科からはみ出ることが多いだろう。

さらに大学に行ってから多様な学びと研究は、高校までの画一的な教科とはまったく質が異なる。学生自身一人ひとりの願いは異なり、大学の学部の学びの多様さがあるなかで、偏差値という単純な数字を頼りにして序列化することで何が判断されてきたのだろうか。しかし、これほど当たり前のものとして受け止められているのは、数字の呪縛がそれだけ強いということでもある。

一九五七年に東京都港区の中学校教員だった桑田昭三が、学力偏差値を考案した^(＊5)。当初は教員の勘に頼っていた進路指導に、信頼できる指標を導入することが目的だったのだが、次第に偏差値は独り歩きし、偏差値そのものが勉強の目的となっていく。例えば英語の学習は英語が使えるようになることではなく、英語のテストの偏差値が上がるのが目的となっている。偏差値そのものは、テストの点数が正規分布すると仮定される母集団のなかで、どの位置にいるのかを示す統計的な指標にすぎない。

本章では「偏差値で人の能力が測れるのか？」と批判したいだけではなく、そもそも^①「人間を数値化して比較すること」で、私たちは一体何をしていることになるのだろうか？」と問いを立てたい。それは数値化・序列化がもたらすものを考えていくためである。

数値至上主義は偏差値に限った話ではない。社会に出たらあらゆる活動が数値で測られる。例えば大学教員である私は、毎年何本論文や著作を出版したのか、いくら助成金を獲得したのかを大学に報告する。業績の報告のあと、年度末に次年度の目標を立てて提出している。つまり目標と成果が数値で計測され評価されるのだ。民間企業に勤めている人たちは、もちろん私どころではない。

さらに、個人の問題だけではなく、学部としても次年度の数値目標を立て、年度末に達成状況を大学本部に報告する。大学全体でも同じデータ集めは行われており、各学部で作成させた六カ年ごとの中期計画のデータを集計して文部科学省へと報告して国からの評価を受けている。

つまり個人から組織、国家にいたるまで、子どもから大人にいたるまですべて数値で評価されている。数値に基づいて行動が計画・評価され、価値が決められるのだ。

2025年度 大学院入学試験 問題用紙

秋 季	心理学専攻 博士前期課程 心理学コース	方 式	科 目
		A 一 般	小 論 文

受験番号 _____

氏 名 _____

(3 - 2)

もちろん数値化されるのは人だけではない。自然と社会を含む森羅万象が一九世紀にいたって数値で測られるようになった。そして、この数値化は、統計学の支配という形を取ってきた。たとえば現在、医療の世界では「エビデンス（根拠）」に基づく医療（EBM）」が絶対的な価値を持つ。これは統計学的に病態を分析し、統計学的に有効であると認められた治療法を選択するという営みだ。一九九一年にカナダの医師ゴードン・ガイアットが提唱した考え方である。

医療のエビデンスにはいくつかのグレードがある。もつとも確度の高いエビデンスは、患者を、ランダムに薬を投与する群と薬を投与しない群というように二つの群に分けて有効性を検討するランダム化比較試験（RCT）を、さらに複数比較し、メタ分析した結果である。RCTの根っこには統計的な妥当性の評価がある。統計的に検討された複数の試験を組み合わせることで、妥当性を上げていく。

エビデンスによって有効な診断方法や治療法が整備されるということには異論がないし、私自身もエビデンスにもとづく医療を選ぶ。しかし病の経験は、エビデンスにもとづく選択だけでは語り切れない。

再発がんが進行しているので「急に具合が悪くなる」可能性があるから、と緩和ケアを探すことを主治医から勧められた哲学者の宮野真生子は、エビデンスにもとづく医療において常に問題になるリスクについて次のように述べている。

リスクと可能性によって、「がんが再発した」私の人生はどんどん細分化されていきます。しかも、病と薬を巡るリスクはたくさんありますから、そのなかで、良くない可能性が人生の大半の可能性を占めるように感じ、何も起こらず「普通に生きてゆく」可能性はとても小さくなったような気がしています。（中略）

でも、このリスクと可能性をめぐる感覚はやっぱどこか変なのです。

おかしさの原因は、リスクの語りによって、人生が細分化されていくところにあります。そのとき患者は、いま自分の目の前にいくつもの分岐ルートが示されているように感じます。それぞれのルートに矢印で行き先が書かれていて、患者たちはリスクに基づく良くないルートを避け、「普通に生きていける」ルートを選び、慎重に歩こうとします。

けれど、本当は分岐ルートのどれを選ぼうと、示す矢印の先にたどり着くかどうかはわからないのです。なぜなら、それぞれの分岐ルートが一本道であるはずがなく、どの分岐ルートもそこに入ってしまったら、また複数の分岐があるからです（*6）。

エビデンスによって有効とされる治療を選ぶプロセスには際限がない。病が進行していくプロセスのなかで、効果が出る確率が高い治療法が選ばれることが多いだろう。しかし確率が高いといっても「四〇％の人にはこの治療法が有効であった」という意味であり、残りの六〇％の患者には効かない。つねに数値をめぐる患者は「効かないかもしれない」と不安な状態に置かれること

2025年度 大学院入学試験 問題用紙

秋 季	心理学専攻 博士前期課程 心理学コース	方 式	科 目
		A 一 般	小 論 文

受験番号 _____

氏 名 _____

(3 - 3)

になる。宮野はこの手紙から半年ほどのちに四〇代前半で亡くなったが、エビデンスに基づくリスク計算に迫られてしまうと、人生の残り時間が確率と不安に支配されるものになってしまうだろう。

科学哲学者のイアン・ハッキング（一九三六―）は、世界そのものが数値化したときに、世界は統計（確率）によって支配されることになったと書いている。

世界が自然法則によって支配されているとみなす決定論的な自然科学の展開のなかで統計学は発達し、社会および人間は統制可能で予測可能なものとなっていく。

アメリカのゴールデンアワーのテレビでは、（中略）露骨な暴力シーンよりも、確率について語られることの方が多くのである。新聞をにぎわせる恐怖が、確率を使って繰り返し語られる。その可能性（偶然・確率）chanceがあるのは、メルトダウン、^{がん}癌、強盗、地震、核の冬、エイズ、地球温暖化、その他である。恐怖の対象は（たぶん）これらではなくて、実は確率そのものである。（中略）

このような確率の支配は、世界そのものが数値化されたところでのみ起こり得たものである。我々は自然に対して、それがどんなものであり、またどんなものであるべきなのか、根底的には量的な感覚を持っている。これは当たり前のことではなく、いくつかのささいな理由もあつてたまたまそうなのである（*7）。

統計学が力を持つ現状は、自然と社会のリアリティの在処^{あつか}が具体的な出来事から、数字へと置き換わったことの象徴である。^②当初、統計は世界のリアリティについてのある程度の傾向を示す指標と見なされていたが、次第に統計が世界の法則そのものであると考えられるようになった。統計は事実に近い近似値ではなく事実そのものの位置を獲得するのだ（*8）。

出典：村上靖彦（二〇二三）『客観性の落とし穴』 筑摩書房 出題にあたり文章を一部改変し、出題内容に関連しない注釈（*）の説明は削除した。

問1 傍線部①「人間を数値化して比較することで、私たちは一体何をしていることになるだろうか？」という筆者の問に対するあなたの考えを述べなさい。ただし数値化して比較することに対する肯定的な意見と否定的な意見をどちらも含めること。

問2 傍線部②「当初、統計は世界のリアリティについてと考えられるようになった」という筆者の指摘に対して賛成、反対のいずれかの立場からあなたの考えを述べなさい。

2025年度 大学院入学試験 問題用紙

春 季	心理学専攻 博士前期課程 心理学コース	方 式	科 目
		A 一 般	専 門

受験番号 _____

氏 名 _____

(1 - 1)

《解答別紙》

問題Ⅰ 以下の問①～⑥のうち1つを選んで解答しなさい。

(選択した問題番号を解答用紙のカッコ内に記入すること。)

- ① 心理学研究における研究結果の再現性と、統計的仮説検定における結果の解釈の誤りとの関連について論じなさい。
- ② 構成概念の操作的定義について、具体例を挙げながら論じなさい。
- ③ 動機づけとは何かを定義しなさい。その上で人間の動機づけを説明する理論を2つ挙げ、各々の理論について具体例を挙げながら説明しなさい。さらに、2つの理論を比較し、各々の長所と短所について述べなさい。
- ④ 顔の認知に関連する研究を一つ挙げて、主要な結果と考察、その研究の意義について説明しなさい。さらに、ヒトの顔の認知処理プロセスについて、関連する脳部位との対応にもふれながら説明しなさい。
- ⑤ 犯罪の生物学的原因について行われた家系研究、養子研究、双生児研究について、それぞれの研究が見出した知見と方法論的な限界を比較しながら説明しなさい。
- ⑥ バルテスが提唱した生涯発達における発達理論について述べなさい。

問題Ⅱ 次の15個の用語の中から10個を選び、各々の用語の意味することを簡潔に説明しなさい。

(選択した用語の問題番号を解答用紙のカッコ内に記入すること。)

- ① 散布度
- ② ノンパラメトリック検定
- ③ 実験計画
- ④ SD 法
- ⑤ フェヒナーの法則
- ⑥ プレグナンツの法則
- ⑦ 自己スキーマ
- ⑧ 自己知覚理論
- ⑨ レム睡眠
- ⑩ 事後情報効果
- ⑪ 秩序型殺人と無秩序型殺人
- ⑫ 内集団バイアス
- ⑬ ヴィルヘルム＝ヴント
- ⑭ 発生的認識論
- ⑮ 忘却曲線

2025年度 大学院入学試験 問題用紙

春 季	心理学専攻 博士前期課程 心理学コース	方 式	科 目
		A 一 般 B 社会人 共通	小 論 文

受験番号 _____

氏 名 _____

(3 - 1)

《解答別紙》

次の文章を読み、問に答えなさい。

日本の若者の多くは受験勉強を強いられ、偏差値を気にしているだろう。日本では長年にわたり偏差値によって学校は一直線にランク付けされ、受験生たちは模擬試験や本試験の結果に一喜一憂している。誰もが自由に学ぶ権利をもつはずなのに、学校にランク付けがあり、入学試験で排除することがあるということは奇妙でもある。

また、さまざまな研究分野をもつ大学が、なぜ「私立文系」「国立理系」といった雑なくりのなかで序列がつけられるのだろうか。私たちはそれぞれ興味を持つことが異なり、そもそも興味や得意は、中学や高校で行われる教科からはみ出ることが多いだろう。

さらに大学に行ってから多様な学びと研究は、高校までの画一的な教科とはまったく質が異なる。学生自身一人ひとりの願いは異なり、大学の学部学びの多様さがあるなかで、偏差値という単純な数字を頼りにして序列化することで何が判断されてきたのだろうか。しかし、これほど当たり前のものとして受け止められているのは、数字の呪縛がそれだけ強いということでもある。

一九五七年に東京都港区の中学校教員だった桑田昭三が、学力偏差値を考案した^(※5)。当初は教員の勘に頼っていた進路指導に、信頼できる指標を導入することが目的だったのだが、次第に偏差値は独り歩きし、偏差値そのものが勉強の目的となっていく。例えば英語の学習は英語が使えるようになることではなく、英語のテストの偏差値が上がることを目的となっている。偏差値そのものは、テストの点数が正規分布すると仮定される母集団のなかで、どの位置にいるのかを示す統計的な指標にすぎない。

本章では「偏差値で人の能力が測れるのか？」と批判したいだけではなく、そもそも^①「人間を数値化して比較することで、私たちは一体何をしていることになるのだろうか？」と問いを立てたい。それは数値化・序列化がもたらすものを考えていくためである。

数値至上主義は偏差値に限った話ではない。社会に出たらあらゆる活動が数値で測られる。例えば大学教員である私は、毎年何本論文や著作を出版したのか、いくら助成金を獲得したのかを大学に報告する。業績の報告のあと、年度末に次年度の目標を立てて提出している。つまり目標と成果が数値で計測され評価されるのだ。民間企業に勤めている人たちは、もちろん私どころではない。

さらに、個人の問題だけではなく、学部としても次年度の数値目標を立て、年度末に達成状況を大学本部に報告する。大学全体でも同じデータ集めは行われており、各学部で作成させた六カ年ごとの中期計画のデータを集計して文部科学省へと報告して国からの評価を受けている。

つまり個人から組織、国家にいたるまで、子どもから大人にいたるまですべて数値で評価されている。数値に基づいて行動が計画・評価され、価値が決められるのだ。

2025年度 大学院入学試験 問題用紙

春 季	心理学専攻 博士前期課程 心理学コース	方 式	科 目
		A 一 般 B 社会人 共通	小 論 文

受験番号 _____

氏 名 _____

(3 - 2)

もちろん数値化されるのは人だけではない。自然と社会を含む森羅万象が一九世紀にいたって数値で測られるようになった。そして、この数値化は、統計学の支配という形を取ってきた。たとえば現在、医療の世界では「エビデンス（根拠）」に基づく医療（EBM）」が絶対的な価値を持つ。これは統計学的に病態を分析し、統計学的に有効であると認められた治療法を選択するという営みだ。一九九一年にカナダの医師ゴードン・ガイアットが提唱した考え方である。

医療のエビデンスにはいくつかのグレードがある。もともと確度の高いエビデンスは、患者を、ランダムに薬を投与する群と薬を投与しない群というように二つの群に分けて有効性を検討するランダム化比較試験（RCT）を、さらに複数比較し、メタ分析した結果である。RCTの根っこには統計的な妥当性の評価がある。統計的に検討された複数の試験を組み合わせることで、妥当性を上げていく。

エビデンスによって有効な診断方法や治療法が整備されるということには異論がないし、私自身もエビデンスにもとづく医療を選ぶ。しかし病の経験は、エビデンスにもとづく選択だけでは語り切れない。

再発がんが進行しているので「急に具合が悪くなる」可能性があるから、と緩和ケアを探すことを主治医から勧められた哲学者の宮野真生子は、エビデンスにもとづく医療において常に問題になるリスクについて次のように述べている。

リスクと可能性によって、「がんが再発した」私の人生はほとんど細分化されていきます。しかも、病と薬を巡るリスクはたくさんありますから、そのなかで、良くない可能性が人生の大半の可能性を占めるように感じ、何も起こらず「普通に生きてゆく」可能性はとも小さくなったような気がします。（中略）

でも、このリスクと可能性をめぐる感覚はやっぱりどこか変なのです。

おかしさの原因は、リスクの語りによって、人生が細分化されていくところにあります。そのとき患者は、いま自分の目の前にいくつもの分岐ルートが示されているように感じます。それぞれのルートに矢印で行き先が書かれていて、患者たちはリスクに基づく良くないルートを避け、「普通に生きていける」ルートを選び、慎重に歩こうとします。

けれど、本当は分岐ルートのどれを選ぼうと、示す矢印の先にたどり着くかどうかはわからないのです。なぜなら、それぞれの分岐ルートが一本道であるはずがなく、どの分岐ルートもそこに入ってしまったら、また複数の分岐があるからです（*6）。

エビデンスによって有効とされる治療を選ぶプロセスには際限がない。病が進行していくプロセスのなかで、効果が出る確率が高い治療法が選ばれることが多いだろう。しかし確率が高いといっても「四〇%の人にはこの治療法が有効であった」という意味であり、残りの六〇%の患者には効かない。つねに数値をめぐる患者は「効かないかもしれない」と不安な状態に置かれること

2025年度 大学院入学試験 問題用紙

春 季	心理学専攻 博士前期課程 心理学コース	方 式	科 目
		A 一 般 B 社会人 共通	小 論 文

受験番号 _____

氏 名 _____

(3 - 3)

になる。宮野はこの手紙から半年ほどのちに四〇代前半で亡くなったが、エビデンスに基づくリスク計算に迫られてしまうと、人生の残り時間が確率と不安に支配されるものになってしまうだろう。

科学哲学者のイアン・ハッキング（一九三六―）は、世界そのものが数学化したときに、世界は統計（確率）によって支配されることになったと書いている。

世界が自然法則によって支配されているとみなす決定論的な自然科学の展開のなかで統計学は発達し、社会および人間は統制可能で予測可能なものとなっていく。

アメリカのゴールデンアワーのテレビでは、（中略）露骨な暴力シーンよりも、確率について語られることの方が多のである。新聞をにぎわせる恐怖が、確率を使って繰り返し語られる。その可能性（偶然・確率）chanceがあるのは、メルトダウン、^{がん}癌、強盗、地震、核の冬、エイズ、地球温暖化、その他である。恐怖の対象は（たぶん）これらではなくて、実は確率そのものである。（中略）

このような確率の支配は、世界そのものが数学化されたところでのみ起こり得たものである。我々は自然に対して、それがどんなものであり、またどんなものであるべきなのか、根底的には量的な感覚を持っている。これは当たり前のことではなく、いくつかのささいな理由もあつてたまたまそうだったのである（*7）。

統計学が力を持つ現状は、自然と社会のリアリティの在処^{ありか}が具体的な出来事から、数字へと置き換わったことの象徴である。^②当初、統計は世界のリアリティについてのある程度の傾向を示す指標と見なされていたが、次第に統計が世界の法則そのものであると考えられるようになった。統計は事実に近い近似値ではなく事実そのものの位置を獲得するのだ（*8）。

出典：村上靖彦（二〇二三）『客観性の落とし穴』 筑摩書房 出題にあたり文章を一部改変し、出題内容に関連しない注釈（*）の説明は削除した。

問1 傍線部①「人間を数値化して比較することで、私たちは一体何をしていることになるだろうか？」という筆者の問に対するあなたの考えを述べなさい。ただし数値化して比較することに対する肯定的な意見と否定的な意見をどちらも含めること。
問2 傍線部②「当初、統計は世界のリアリティについてと考えられるようになった」という筆者の指摘に対して賛成、反対のいずれかの立場からあなたの考えを述べなさい。